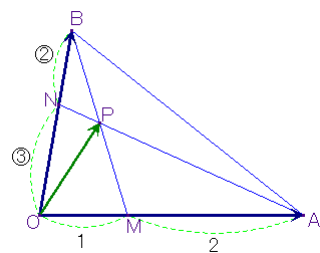


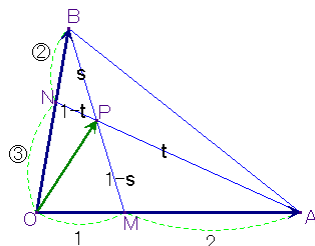
## 5 問題への応用

試験の問題に応用してみます.

[例 1] 線分  $OA$  を  $1:2$  に内分する点を  $M$ , 線分  $OB$  を  $3:2$  に内分する点を  $N$  とする. このとき直線  $AN$  と直線  $BM$  の交点  $P$  を  $\overrightarrow{OA}$  と  $\overrightarrow{OB}$  で表せ.



[解 1] (最も標準的な解法)



$P$  は線分  $AN$ ,  $BM$  を内分しているため,  $BP:PM = s:(1-s)$ ,  $AP:PN = t:(1-t)$  ( $0 < s < 1, 0 < t < 1$ ) とおける. ( $P$  が  $AB$  を外分している時は, このように置けません. 直接, 下の式を書き下します.)

よって

$$\begin{cases} \overrightarrow{OP} = (1-t)\overrightarrow{OA} + t\overrightarrow{ON} = (1-t)\overrightarrow{OA} + \frac{3}{5}t\overrightarrow{OB} \cdots \textcircled{1} \\ \overrightarrow{OP} = (1-s)\overrightarrow{OB} + s\overrightarrow{OM} = \frac{1}{3}s\overrightarrow{OA} + (1-s)\overrightarrow{OB} \cdots \textcircled{2} \end{cases}$$

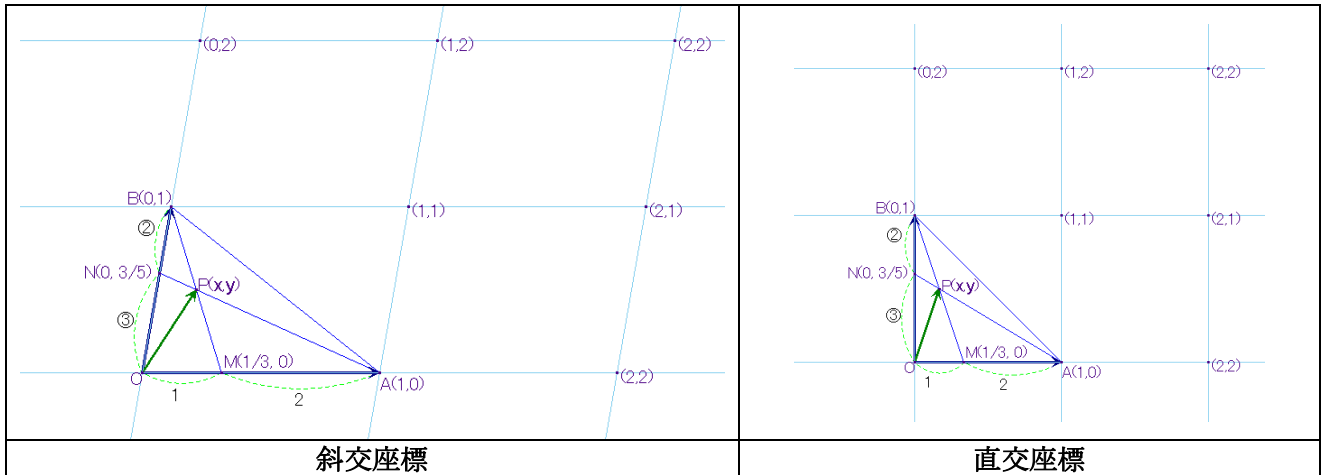
「 $\overrightarrow{OP} = \alpha\overrightarrow{OA} + \beta\overrightarrow{OB}$  ( $\alpha, \beta$  は実数)」とただ一通りに表せるので, ①, ②より,

$$\begin{cases} 1-t = \frac{1}{3}s \\ \frac{3}{5}t = 1-s \end{cases} \quad \therefore \begin{cases} t = \frac{5}{6} \\ s = \frac{1}{2} \end{cases}$$

①へ代入して

$$\overrightarrow{OP} = \frac{1}{6}\overrightarrow{OA} + \frac{1}{2}\overrightarrow{OB} \cdots (\text{ans})$$

[解 2] (斜交座標を利用した解法)



「 $\overrightarrow{OP} = x\overrightarrow{OA} + y\overrightarrow{OB}$  ( $x, y$ は実数)」とおくと、Pは直線 AN 上より

$$y = -\frac{3}{5}x + \frac{3}{5} \dots \textcircled{1} \quad [\leftarrow \text{直交座標を参考に求める}]$$

Pは直線 BM 上より

$$y = -3x + 1 \dots \textcircled{2} \quad [\leftarrow \text{直交座標を参考に求める}]$$

①と②を連立して、

$$(x, y) = \left(\frac{1}{6}, \frac{1}{2}\right) \quad [\leftarrow \text{直交座標における P の座標と同じ!!}]$$

よって、

$$\overrightarrow{OP} = \frac{1}{6}\overrightarrow{OA} + \frac{1}{2}\overrightarrow{OB} \dots (\text{ans})$$

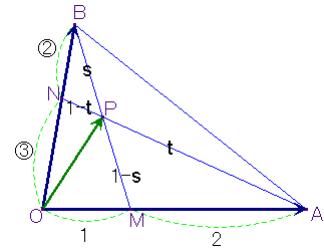
このやり方は一番速いです。しかし、記述では、点数をもらうのは難しいでしょう。(個人的には、「必要とあれば、厳密な書き方もできる」のなら、満点を上げて良いと思っています。)

**[解 3] (解 1+解 2)**

[解 2]は非常に早いですが、記述式では減点されるでしょう。しかし[解 1]を利用して、厳密化できます。

[解 1]と同様にして、

$$\begin{cases} \overline{OP} = (1-t)\overline{OA} + t\overline{ON} = (1-t)\overline{OA} + \frac{3}{5}t\overline{OB} \cdots \textcircled{1} \\ \overline{OP} = (1-s)\overline{OB} + s\overline{OM} = \frac{1}{3}s\overline{OA} + (1-s)\overline{OB} \cdots \textcircled{2} \end{cases}$$



「 $\overline{OP} = x\overline{OA} + y\overline{OB}$ 」とおくと、①より

$$\begin{cases} x = 1-t \\ y = \frac{3}{5}t \end{cases}$$

これから  $t$  を消去して、

$$y = \frac{3}{5}(1-x) \cdots \textcircled{3}$$

この式は、「解 2」の①の式と一致する! 同様に、②より

$$\begin{cases} x = \frac{1}{3}s \\ y = 1-s \end{cases}$$

これから  $s$  を消去して、

$$y = 1 - 3x \cdots \textcircled{4}$$

この式は、「解 2」の②の式と一致します! ③と④を連立して、

$$(x, y) = \left( \frac{1}{6}, \frac{1}{2} \right)$$

よって、

$$\overline{OP} = \frac{1}{6}\overline{OA} + \frac{1}{2}\overline{OB} \cdots (\text{ans})$$

**【注】** しかしこのやり方は実戦的ではありません。「直線のパラメーター表示」を、わざわざ「 $x$ と $y$ の式」に代えて交点を出しています。しかし、

「 $\overline{OP} = (1-t)\overline{OA} + t\overline{OB}$ 」と言う表し方は、 $x + y = 1$ 上の点を  $(1-t, t)$  とパラメータ表示したもの

となることは分かって頂けたと思います。[解 2] は、答えだけが欲しい時、または難問で「見通し」を得るときに役立ちます。さらに、メネラウスやチェバの定理を使う方法もありますが、割愛します。

**[例 2]** 平面上に三角形  $OAB$  があり，実数  $\alpha, \beta$  が，次の条件を満たしながら変化するとき，  
 「 $\overline{OP} = \alpha\overline{OA} + \beta\overline{OB}$ 」で表される点  $P$  の存在する範囲を示せ。

(1)  $\alpha + 2\beta = 2$

(2)  $1 \leq \alpha + 2\beta \leq 2, \alpha \geq 0, \beta \geq 0$

**[解 1]** (共線条件を使ったやり方)

途中の経過も書かなくてはいけない時は「共線条件」だけを使って導くのが良いでしょう。そのために「 $s+t=1$ 」の形を作ります。

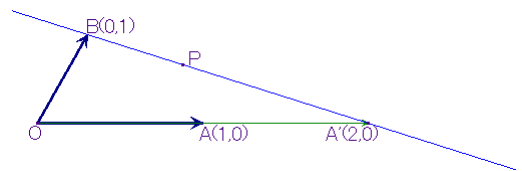
(1) 「 $\alpha + 2\beta = 2$ 」の両辺を 2 で割ると，

$$\frac{\alpha}{2} + \beta = 1 \dots \textcircled{1}$$

よって，

$$\overline{OP} = \alpha\overline{OA} + \beta\overline{OB} = \frac{\alpha}{2}(2\overline{OA}) + \beta\overline{OB} = \frac{\alpha}{2}\overline{OA'} + \beta\overline{OB} \quad (\text{ただし } \overline{OA'} = 2\overline{OA})$$

ゆえに， $\textcircled{1}$ より， $P$  は直線  $A'B$  を描く。(右図)



**[注]**  $(\alpha, \beta) = (2, 0)$  &  $(\alpha, \beta) = (0, 1)$  の二つは，明らかに「 $\alpha + 2\beta = 2$ 」をみたす。よって「2点  $A'$  と  $B$  を通る曲線」となることは厳密に正しいです。しかし「直線になることが証明できていない」ので「直線  $A'B$ 」とはできません。「 $\overline{OP} = \alpha\overline{OA} + \beta\overline{OB}, \alpha + 2\beta = 2$ 」をみたす点  $P$  の集合が，直線を表すことを証明すれば，満点になります。

(2)

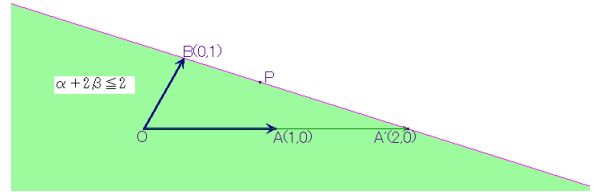
$$1 \leq \alpha + 2\beta \leq 2, \alpha \geq 0, \beta \geq 0 \iff \begin{cases} \alpha + 2\beta \geq 1 & \dots \textcircled{1} \\ \alpha + 2\beta \leq 2 & \dots \textcircled{2} \\ \alpha \geq 0, \beta \geq 0 & \dots \textcircled{3} \end{cases}$$

「 $\alpha + 2\beta \leq 2$ 」の両辺を2で割ると、

$$\frac{\alpha}{2} + \beta \leq 1$$

$$\overline{OP} = \alpha \overline{OA} + \beta \overline{OB} = \frac{\alpha}{2} (2\overline{OA}) + \beta \overline{OB} = \frac{\alpha}{2} \overline{OA'} + \beta \overline{OB} \quad (\text{ただし } \overline{OA'} = 2\overline{OA})$$

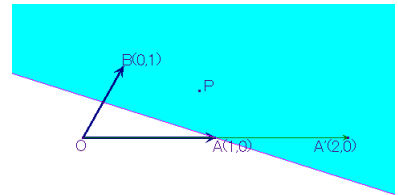
故に、①よりPは直線A'B'に関し原点と同じ側を動く。



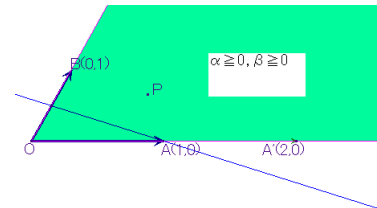
次に、「 $\alpha + 2\beta \geq 1$ 」を使う。

$$\overline{OP} = \alpha \overline{OA} + \beta \overline{OB} = \alpha \overline{OA} + 2\beta \left( \frac{1}{2} \overline{OB} \right) = \alpha \overline{OA} + 2\beta \overline{OB'} \quad (\text{ただし } \overline{OB'} = \frac{1}{2} \overline{OB})$$

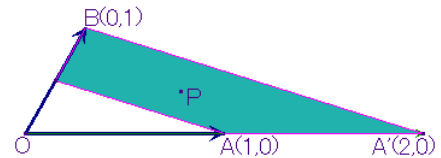
「 $\alpha + 2\beta \geq 1$ 」だから、直線AB'に関し原点と反対側の領域になる。



最後に「 $\alpha \geq 0, \beta \geq 0$ 」は右図のようになる。



以上の共通部分をとると、右図のようになる。(答え)



**[解 2] (斜交座標を使ったやり方)**

斜交座標を使うと、答えはすぐ求まります。しかし、途中の経過が要求される場合はまずいでしょう。

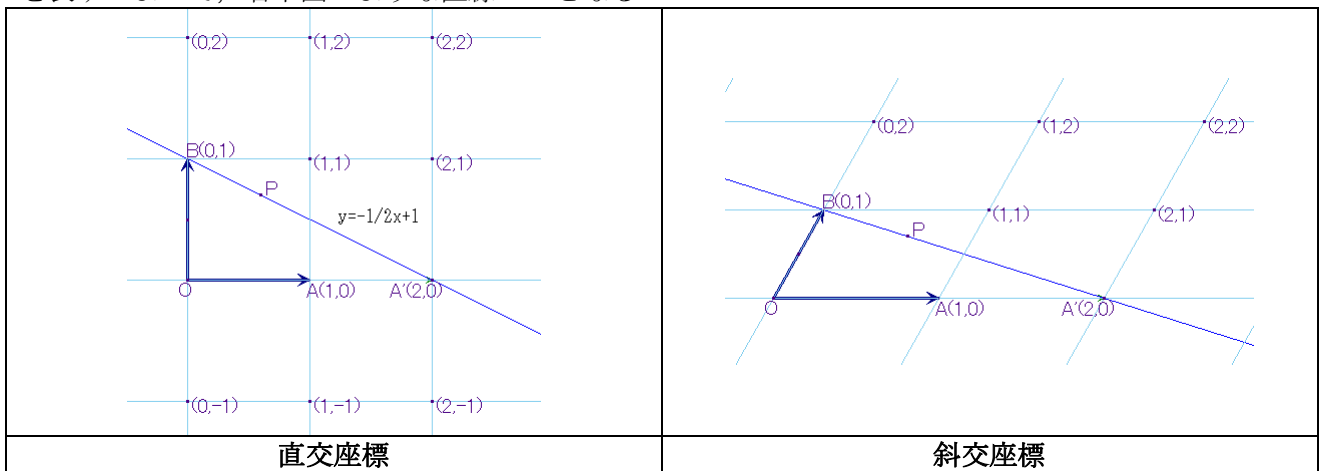
(1) 「 $\overline{OP} = \alpha\overline{OA} + \beta\overline{OB} (\alpha + 2\beta = 2)$ 」は、 $A(1,0)$ 、 $B(0,1)$ のときは、

$$\overline{OP} = \alpha\overline{OA} + \beta\overline{OB} = \alpha \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} + \beta \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \alpha \\ \beta \end{pmatrix}$$

すなわち、「 $P$ の $x$ 成分が $\alpha$ 、 $y$ 成分が $\beta$ 」となるので、 $P(x,y)$ とおくと、

$$x + 2y = 2 \iff y = -\frac{1}{2}x + 1$$

を表す。よって、右下図のような直線  $A'B$  となる。



(2) (1)と同様にして「 $1 \leq \alpha + 2\beta \leq 2, \alpha \geq 0, \beta \geq 0$ 」は、直交座標では、

$$1 \leq x + 2y \leq 2, \quad x \geq 0, y \geq 0$$

を表します。(左下図) よって、斜交座標では、右下図のような領域になります。

